

所属・資格 ドイツ文学科・准教授

申請者氏名 関口 なほ子

研究課題		ドイツ語圏の女性作家・作品研究－1920-30年代を中心に
報告の概要	研究目的 および 研究概要	ドイツ・ユダヤ人女性作家やドイツ人女性作家の作品において、個々のテーマ設定と個人性に基づく言語表現の特徴を考察し、時代と社会に対する女性の問題意識、ひいては1920・30年代の女性文学に関する共時的理解を深めることを目的とする。その過程において、女性が父権制社会において自由を追求し、自己実現していくプロセスが問題視された。そのためこの課題を考察する端緒として、主権者（権力者）への抵抗や反逆行為によって、自己主張を貫徹する神話的形姿の代表『アンティゴネ』（ソポクレス）に着目し、近・現代における文学的受容を考察するに至った。
	研究の結果	アンティゴネ神話をモチーフにした近・現代文学作品のなかで、今回考察対象に取り上げたものは第一次・第二次世界大戦を背景にし、ソポクレスのアンティゴネを改編した3つの戯曲、ヴァルター・ハーゼンクレーバー、ジャン・アヌイ、ベルトルト・ブレヒトの『アンティゴネ』、そしてユダヤ人女性作家グレーテ・ヴァイルの小説『私の姉アンティゴネ』である。ハーゼンクレーバーの〈アンティゴネ〉には、善と悪の両義性をもつヨーロッパの伝統的な女性像の提示がみられるが、アンティゴネは父権制社会に対抗する一定の〈力〉を維持している。アヌイのアンティゴネは伝統的な女性像の枠組みから解放され、女性の〈個人〉としての意思表示を肯定的に捉え、権力に対する個人の不可能な不服従を体現する。これに対してブレヒトでは、権力機構のなかで主権者に抑圧される人間が明示され、絶対的権力への盲従を強いる独裁社会の構造自体を弾劾するものとなっている。第二次世界大戦中または直後に書かれたアヌイやブレヒトの当該作品においてはとくに、人間の自由を求める自我の実体や人間の本質の解明しがたい恐ろしさと凡庸さが明察されている。グレーテ・ヴァイルの小説においては、ナチ時代を生き延びた主人公による過去の記憶との対決のなかで権力による迫害への「抵抗」という現実的な問題を神話世界のアンティゴネと比べ、現代の戦時下における抵抗の可能性を問う「証言文学」となっている。迫害を黙示した社会においては行動の制限のみならず、人間の本来的人権は剥奪される。作家によるその経験は神話世界の本質的な改編により、既成概念自体の解体を試みるが不可能に終わり、社会構造を脱構築できないままの人間の心性が露呈されている。
	研究の考察・反省	当初掲げていた研究課題からは多少逸脱する形になったが、これまで考察し続けてきたグレーテ・ヴァイルの当該作品のモチーフのバリエーションを通時的に考察することができたことは成果である。だがアンティゴネをモチーフにした作品のうち、ホーホフトやランゲッサーの作品を考察するまでには至らず、さらなる検討課題が残された。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	研究発表	※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。 アンティゴネ神話－その文学的受容と改編について－ 日本大学文理学部ドイツ文学科学術研究発表会 平成30年（2018）12月1日
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	研究成果物	アンティゴネ神話－その文学的受容と改編について－ 「リュンコイス」52号 平成31年（2019）3月5日発行 桜門ドイツ文学会